

OLYMPUS

Your Vision, Our Future

2015年3月期 第2四半期 決算説明会

2014年11月7日
オリンパス株式会社
代表取締役社長執行役員
笹 宏行

オリンパスの笹です。

まず私からこの第2四半期決算の概要と、経営の重要課題として取り組んでいる事項についてご説明します。その後、財務担当役員の竹内より、決算の実績、および通期見通しの詳細についてご説明申し上げます。

2015年3月期第2四半期実績

◆好調な医療事業が全社業績を牽引し、リーマンショック（2008年度）以降の
上期営業利益として最高となる384億円を計上

(単位：億円)	2014年3月期 2Q累計(4-9月) (実績)	2015年3月期 2Q累計(4-9月) (期初見通し)	2015年3月期 2Q累計(4-9月) (実績)	前年 同期比	予想値比
売上高	3,338	3,600	3,550	+6%	△1%
営業利益 (営業利益率)	285 (8.5%)	350 (9.7%)	384 (10.8%)	+35%	+10%
経常利益 (経常利益率)	170 (5.1%)	250 (6.9%)	297 (8.4%)	+75%	+19%
当期純利益 (当期純利益率)	△79 (-)	130 (3.6%)	223 (6.3%)	-	+72%

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

2

こちらは、第2四半期、4月から9月まで累計の実績です。

引き続き好調な医療事業が全社業績を大きく牽引しました。リーマンショック以降の上半期の決算としては過去最高となる連結営業利益384億円を計上し、前年同期との比較においても35%増と大幅な増益を達成することができました。

経常利益、当期純利益も、こうした主力の医療事業の好調に加え、継続的に有利子負債を圧縮し営業外費用が減少したことや、特別損失の減少等により、前年同期比で大幅な増益を達成することができました。

2015年3月期 通期業績見通し

◆通期見通しは据え置き（映像事業の厳しい環境を医療事業中心にカバー）

(単位：億円)	2014年3月期 通期 (実績)	2015年3月期 通期 (見通し)	増減額	前期比
売上高	7,133	7,600	+467	+7%
営業利益 (営業利益率)	734 (10.3%)	880 (11.6%)	+146 (+1.3pt)	+20%
経常利益 (経常利益率)	509 (7.1%)	700 (9.2%)	+191 (+2.1pt)	+38%
当期純利益 (当期純利益率)	136 (1.9%)	450 (5.9%)	+314 (+4.0pt)	+230%

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

3

こちらは、通期の連結業績見通しです。

期初の年間見通しを据え置きます。

売上高は、前期比7%増の7,600億円、営業利益は20%増の880億円、経常利益は38%増の700億円、当期純利益は約3.3倍の450億円となる見通しです。

引き続き、医療事業が好調に推移することで、市場縮小など厳しい事業環境にある映像事業をカバーする形となりました。

医療事業が好調な一方で、映像事業については、今期も期初の計画から赤字が増加する見込みとなり、この点につきましては、経営として大変申し訳なく思っております。

ハイライト

医療事業

過去最高業績と戦略投資の推進

映像事業

事業規模の適正化

こうした、上半期実績、通期見通しの状況を総括すると、ポイントはこちらの2点であると考えます。

医療事業が上半期として過去最高となる大変好調な業績を計上したこと、加えて、この好業績を追い風とし、中長期的な成長に向け医療事業への戦略投資を、この上半期にしっかりと推進できているという点です。

2つ目は、事業再建に取り組んできた映像事業において、残念ながら、予定通りの収益改善が図れていないことです。この点については、経営として厳しく受け止めており、これまで取り組んできた構造改革をもう一段踏み込み、来期に向け映像事業の規模をさらに絞り込む判断をしました。

それでは、この医療、映像のポイントについてもう少し詳しくご説明いたします。

医療事業

医療

医療事業の上期決算として過去最高の業績を達成
中期ビジョン最終年度の目標達成に向けた戦略投資推進

◆戦略投資により、2017年3月期に向け年平均9%の売上高成長を実現

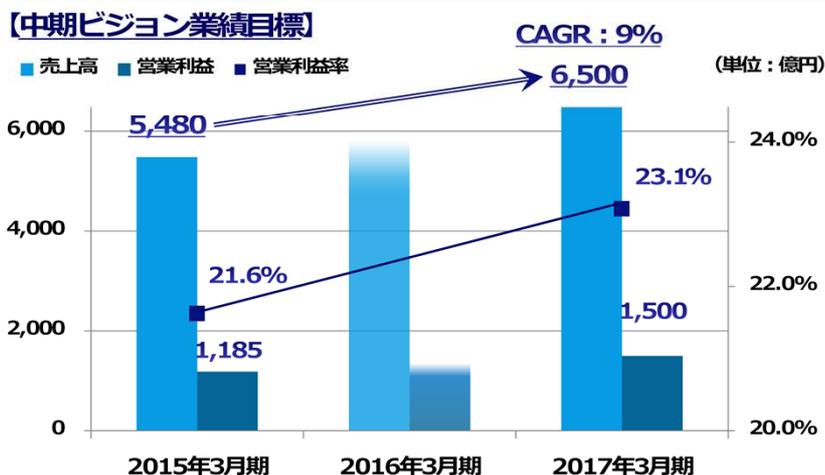
➤ 要員強化、販売促進、 研究開発投資、いずれも 計画通りに進捗

<うち要員強化進捗>

年間 1,000名の増員目標に
対して、約70%の進捗

<トピックス>

北米の処置具分野で要員体制強化
の効果が出始めており、前年同期
比16%増収 (2015/3期 4-9月)



まず、医療事業についてご説明します。

医療事業はこの上半期の決算において、過去最高となる売上高 2,568億円、営業利益 546億円を計上するなど、主力の消化器内視鏡分野を中心に引き続き大変好調な業績を計上しています。

また、今期の重点施策である戦略投資についても、既に700名規模の要員強化が図れるなど、販売促進、研究開発投資も含めて予定通り進捗しています。

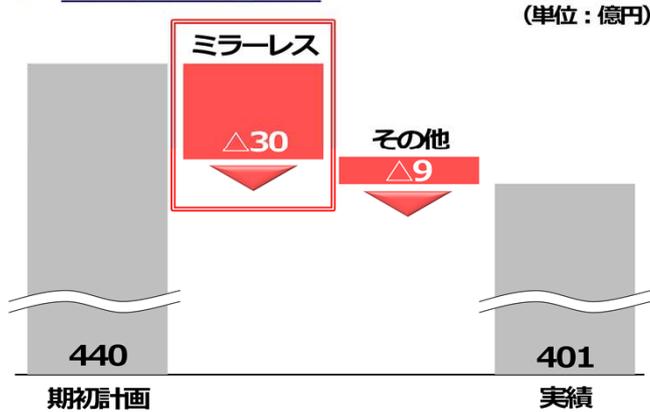
医療事業は投資の成果が実績となって表れるまでに時間の掛かる事業です。その為、平均9%の成長を目指す中期ビジョン最終年度、2017年3月期の経営数値目標の達成に向け、この下半期もしっかりと戦略投資を推進していく考えです。

映像事業 営業損失拡大の要因

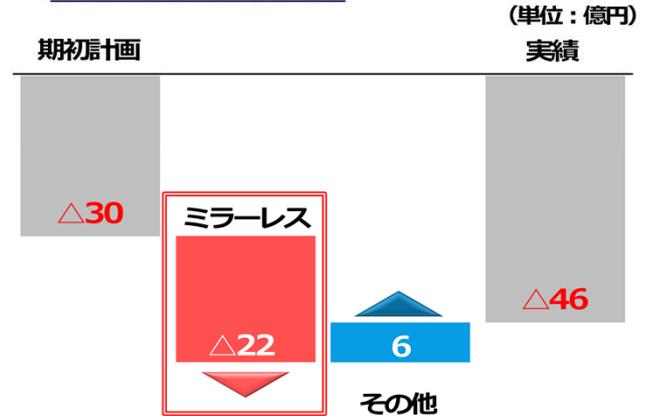
映像

高い成長を目指したミラーレスの売上高未達により、営業損失が拡大

➤ 売上高 未達要因



➤ 営業利益 未達要因



<ミラーレス 計画未達の要因>

- 1** 日本・アジア市場の減速
- 2** PENシリーズの減速
- 3** 円安による原価率の悪化

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

6

映像事業です。

過去2年間の構造改革により、コンパクトカメラ分野が黒字転換するなど、一定の収益改善を実現して参りました。そこで、今期は将来の収益基盤の構築に向けて、ミラーレスの成長加速にチャレンジしてきました。

結果としては、ミラーレスの売上高は前年比で2桁の成長を実現したものの、高い目標を実現するには至らず、こちらのグラフにあるように、売上高、営業利益共にミラーレスの目標未達が映像事業の業績修正の要因となっています。

売上高については、これまでミラーレスの成長を牽引した日本、アジア市場の想定以上の減速と、製品では特にPENシリーズの落ち込みが大きく影響しました。利益面では、足下の円安もミラーレスの採算を悪化させる一因となりました。

事業規模の適正化

ミラーレスの拡大を見直し、来期の収支均衡を最優先に構造改革

こうした現状を踏まえて、今回、映像事業の基本方針を修正し、ミラーレスの事業規模を適正な水準へ、計画段階から、もう一段絞り込む、構造改革を進める判断をしました。

想定する売上規模を厳しく見直し、来期の収支均衡を最優先に費用構造の改革に取り組みます。

1 800億円以下の売上高で収支均衡できる費用水準

➤ 販管費20%削減を前提とした構造改革

2 固定費の見直し・合理化

➤ 製造、開発、間接部門リソースシフト

3 地域戦略の見直し

➤ 市場成長が見込めない地域のリソース圧縮

こちらが、その具体的な内容です。

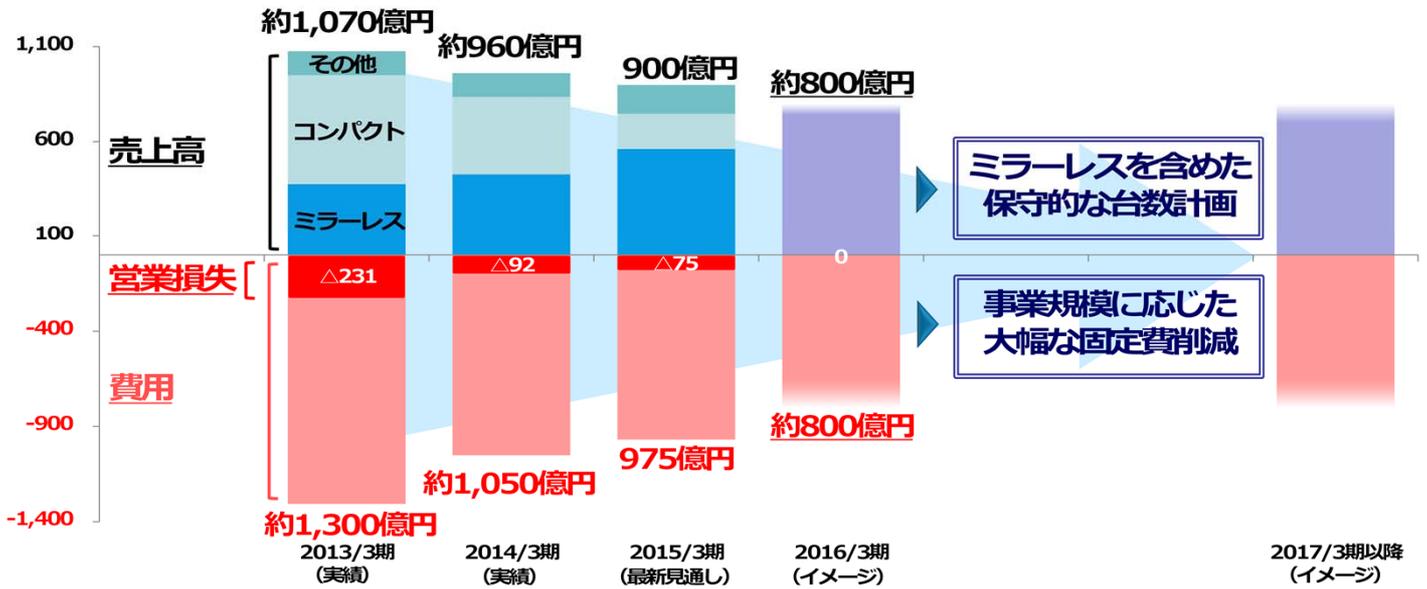
まず、販管費を約20%削減し、800億円以下の売上規模で収支均衡できる費用水準まで絞り込みます。

具体的には、保守的な販売目標を設定し、製造、開発、そして、間接部門のリソースを、成長領域へシフトすることなどで、あらためて固定費を見直し、圧縮を図ります。

3点目として、地域戦略も客観的に再点検し、市場成長が期待できない地域のリソースを縮小します。

映像事業 収支均衡モデル

◆保守的な販売計画による売上とそれに応じた費用水準



2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

こうした取り組みにより、来期以降、売上高800億円以下をベースに収支均衡できる水準まで費用を絞り込むとともに、ミラーレスを含めた保守的な売上計画によって、中期的にも安定した収益が確保できる事業構造に転換を図って参りたいと思います。

尚、来期に向けたこの改革を進める上で、今期の下半期の改善策も大変重要であると認識しております。この点については、後ほど竹内から具体的にご説明申し上げます。

The OLYMPUS logo is centered in the upper half of the page. It consists of the word "OLYMPUS" in a bold, blue, sans-serif font. A thin yellow horizontal line is positioned directly beneath the text.

最後になりました。

この映像事業の改革を早期に完了し、医療事業を中心とした成長を、より一層加速させていくことで、皆様の期待に応えていきたいと思えます。

私からの説明は以上です。

OLYMPUS

Your Vision, Our Future

2015年3月期 第2四半期 連結決算概況

2014年11月7日
オリンパス株式会社
取締役専務執行役員
グループ経営統括室長
竹内 康雄

オリンパスの竹内です。

それでは私から、連結決算数値の概況をご説明申し上げます。

2015年3月期 第2四半期 連結業績および事業概況

まず、第2四半期の決算概況についてご説明申し上げます。

2015年3月期 第2四半期実績 ①連結業績概況

- ◆上期の売上高は前年同期比6%増、営業利益は35%増
- ◆当期純利益は前期の赤字から大幅に改善し、223億円を計上

(単位：億円)	2Q累計 (4-9月)				2Q実績 (7-9月)		
	2014年3月期	2015年3月期	増減額	前年同期比	2014年3月期	2015年3月期	前年同期比
売上高	3,338	3,550	+212	+6%	1,746	1,880	+8%
販管費 (販管費率)	1,764 (52.9%)	1,870 (52.7%)	+106 (-0.2pt)	+6%	904 (51.8%)	956 (50.9%)	+6%
営業利益 (営業利益率)	285 (8.5%)	384 (10.8%)	+99 (+2.3pt)	+35%	203 (11.6%)	234 (12.4%)	+15%
経常利益 (経常利益率)	170 (5.1%)	297 (8.4%)	+127 (+3.3pt)	+75%	146 (8.3%)	185 (9.8%)	+27%
当期純利益 (当期純利益率)	△79 (-)	223 (6.3%)	+303 (-)	-	△61	142 (7.5%)	-
円/US\$	99円	103円	4円 (円安)				
円/Euro	130円	139円	9円 (円安)				
売上高への影響額	-	+136億円					
営業利益への影響額	-	+53億円					

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

13

社長の笹より第2四半期の累計実績の概要については、ご説明しておりますので、私からは数値面を中心にご説明します。

上半期の連結売上高は前年同期比6%増収の3,550億円、営業利益は35%増益の384億円となりました。引き続き医療事業が好調に推移したことに加え、円安による効果もあり、連結営業利益を押し上げました。

経常利益につきましては、有利子負債の圧縮を進め、営業外収支が改善したことにより、75%増益の297億円となりました。当期純利益につきましては、前年度から特別損失が大幅に減少したことにより、303億円増益の223億円となりました。

なお、この上半期の為替レートは、ドルが1ドル103円、ユーロが1ユーロ139円と、いずれも円安になり、売上高に対し、136億円、営業利益に対し、53億円とそれぞれプラス方向に寄与しています。

2015年3月期 第2四半期実績 ②セグメント別概況

- ◆医療事業は売上高・営業利益ともに上期として過去最高を更新し、全社業績を牽引
- ◆その他事業は、バイオロジクス事業からの撤退により黒字化

(単位：億円)		2Q累計 (4-9月)				2Q実績 (7-9月)			
		2014/3	2015/3	増減額	前年同期比	2014/3	2015/3	増減額	前年同期比
医療	売上高	2,298	2,568	+270	+12%	1,219	1,359	+140	+11%
	営業利益	492	546	+54	+11%	307	304	△3	△1%
科学	売上高	440	467	+27	+6%	240	256	+16	+7%
	営業利益	5	13	+7	+129%	15	15	△0	△1%
映像	売上高	470	401	△69	△15%	221	203	△18	△8%
	営業利益	△27	△46	△19	-	△21	△24	△2	-
その他	売上高	130	114	△15	△12%	65	62	△3	△5%
	営業利益	△28	7	+35	-	△14	4	+18	-
全社・消去	売上高	-	-	-	-	-	-	-	-
	営業利益	△157	△136	+21	-	△84	△66	+18	-
連結合計	売上高	3,338	3,550	+212	6%	1,746	1,880	+134	+8%
	営業利益	285	384	+99	+35%	203	234	+30	+15%

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

14

続いて、セグメント別の状況です。

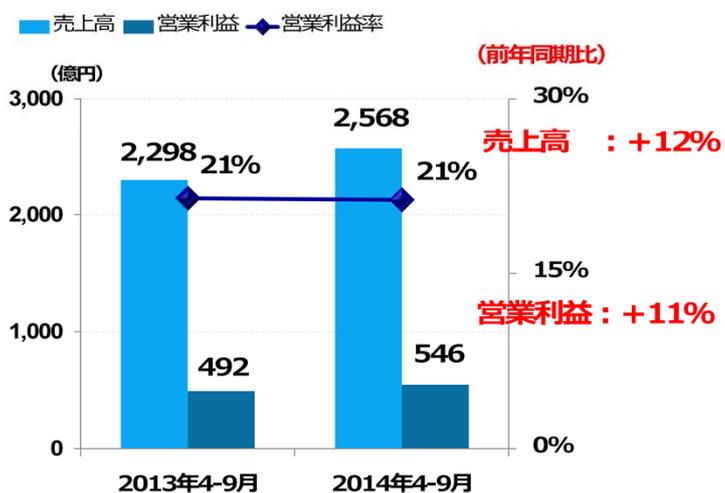
ご覧の通り、医療事業が全社業績を大きく牽引しています。各セグメントの詳細は後ほどご説明しますが、医療事業は売上高、営業利益共に2桁の増収増益となり、上半期としては過去最高となりました。

また、「その他」セグメントも、前年度にバイオロジクス事業から撤退したことで黒字化し、連結営業利益の改善に大きく寄与しました。

2015年3月期 第2四半期実績 ③医療事業

- ◆内視鏡、外科、処置具全分野が好調に推移し、売上高、営業利益ともに過去最高
- ◆2Q（7-9月）の営業利益率低下は戦略投資によるもの

上半期（4-9月）



2Q（7-9月）



2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

15

こちらは、医療事業です。

上半期の売上高は、前年同期比12%増の2,568億円、営業利益は11%増の546億円と、上半期としては過去最高の売上高、営業利益を計上しました。

主力の消化器内視鏡ですが、国内は、期初に懸念されていた消費税増税後の反動も少なく、大変好調であった前年並みの売上を確保しました。北米、欧州、中国など海外も、エクセラスリー等の販売が堅調に推移したことで、消化器内視鏡分野全体で2桁増の12%増収となりました。

外科分野は、注力するエネルギーデバイスのサンダービートが、国内、欧州、アジアで大きく販売を伸ばし、エネルギーデバイス全体で20%を超える成長となりました。外科内視鏡につきましても、泌尿器科をはじめとする各診療科領域で売上が堅調に推移し、外科分野全体で12%の増収となりました。

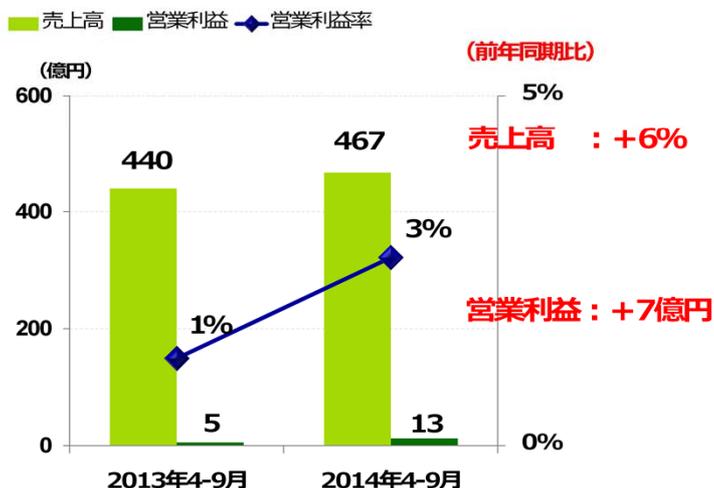
処置具分野は、海外の販売体制強化の効果が出始めており、11%の増収となりました。

なお、右側のグラフは、第2四半期（7-9月）の数値ですが、営業利益率が前年同期比で低下しております。これは今期の重点施策である戦略投資によるものであり、期初の見通しに沿ったものです。

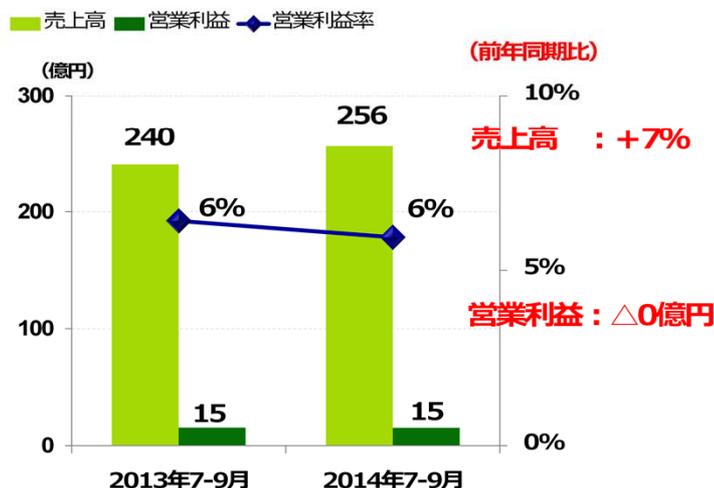
2015年3月期 第2四半期実績 ④科学事業

- ◆海外を中心に好調な非破壊検査分野、生物顕微鏡分野が牽引し、増収増益を確保
- ◆戦略的変換、構造改革は予定通り進捗

上半期 (4-9月)



2Q (7-9月)



2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

16

科学事業です。

売上高は、前年同期比6%増の467億円、営業利益は前年同期比の2.3倍の13億円となりました。

主に海外を中心に、非破壊検査分野、生物顕微鏡分野で政府予算や民間の設備投資が回復基調にあり、増収に寄与しました。

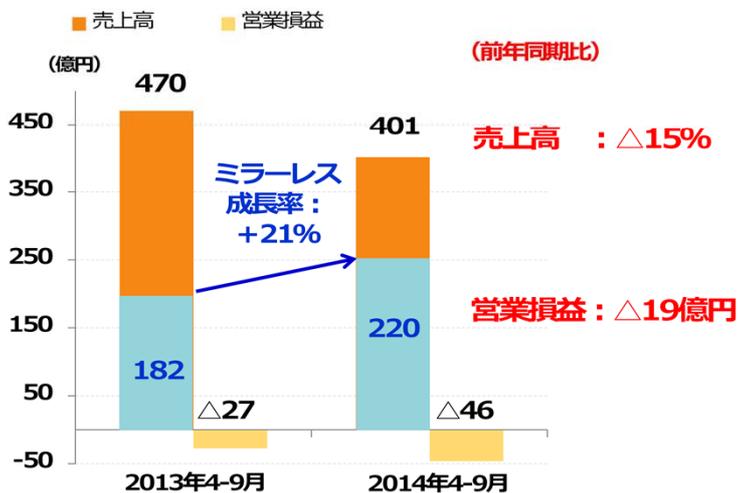
営業利益は、産業分野の新製品効果による収益性改善や、販管費の圧縮により、増益となりました。

また、期初から進んでいる構造改革については、北米、アジアで拠点の統廃合などを進め、計画通りに進捗しております。

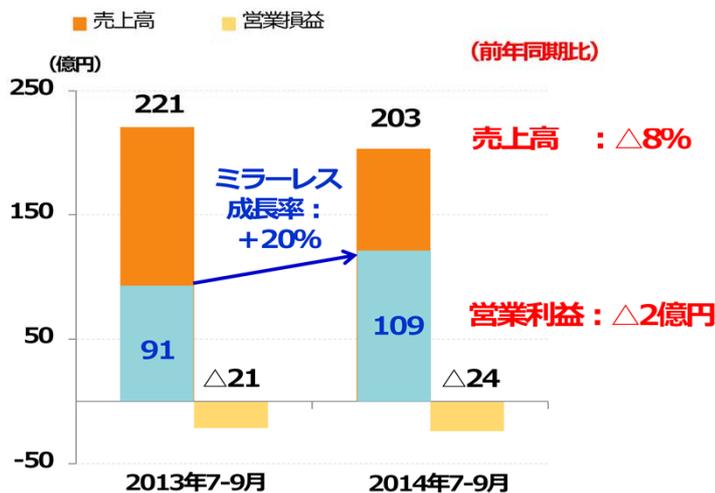
2015年3月期 第2四半期実績 ⑤映像事業- (1)

- ◆コンパクトの販売台数縮小により売上高は15%の減収も、ミラーレスは前期比約20%増収
- ◆ミラーレス及びB to Bへの投資増加により営業損失は46億円

上半期 (4-9月)



2Q (7-9月)



2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

17

続いて映像事業です。

売上高は前年同期比15%減の401億円、営業利益は前年同期比19億円マイナスの46億円の営業損失となりました。

売上高の減少は主にコンパクトカメラの販売台数を大幅に縮小したことによるものです。

ミラーレスについては、主力のOM-Dシリーズが販売を伸ばし、売上高は前年同期比21%増収の220億円となりました。

ミラーレスの販売強化に向けた構造転換を実行した欧米では、特に高い伸びを示し、米国は約20%、欧州では約55%の増収となりました。

営業利益につきましては、売上高が全体で減収となったことに加え、ミラーレスや、BtoBへの投資を行ったことにより、前年同期比で損失が拡大しています。

2015年3月期 第2四半期実績 ⑤映像事業- (2)

2015年3月期 上半期実績の前年同期比

(億円)	2014/3期 2Q (4-9月)	2015/3期 2Q (4-9月)	増減	
売上高	470	401	△69	売上高減少 コンパクトカメラの販売減をミラーレスで補えず、前年同期比減収
ミラーレス	182	220	+38	
コンパクトカメラ・その他	289	181	△107	
売上総利益	221	182	△39	粗利減少
販管費 (販管費率)	248 (52.7%)	228 (56.8%)	△20 (+4.1pt)	販管費率悪化 ミラーレス、B to Bへの投資増加
営業損益	△27	△46	△19	営業損失拡大

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

18

映像事業の損益状況について少し補足致します。

上半期はコンパクトカメラの販売減をミラーレスで補えず、売上高及び売上総利益が減少しました。

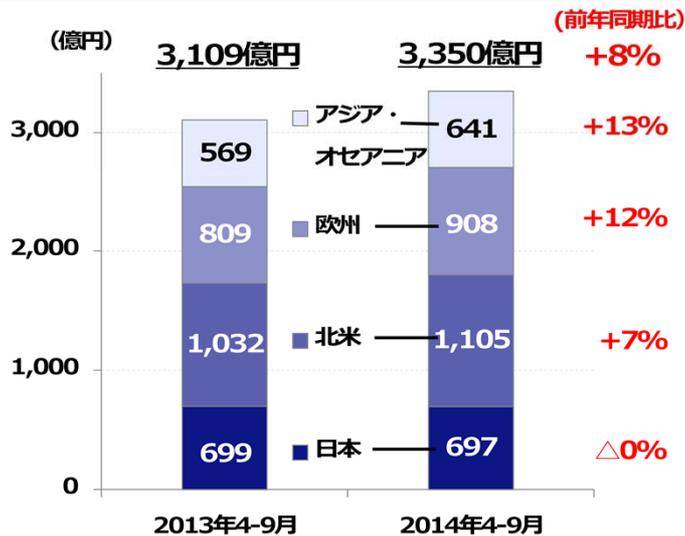
また、売上高が減少したなか、ミラーレスの売上拡大のための投資や、B to B事業への戦略的な投資を予定通り実行したため、販管費率が4ポイント悪化しています。

この結果、営業損失が46億円へ拡大しました。

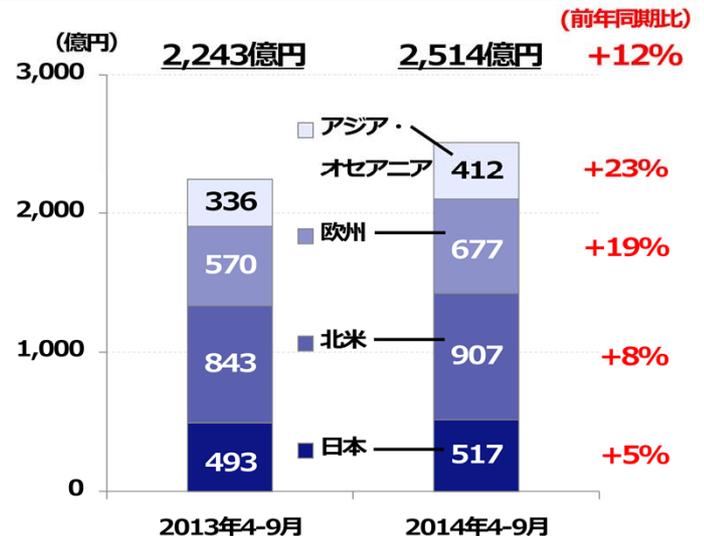
2015年3月期 第2四半期実績 ⑥地域別売上高

◆ 好調な医療事業が牽引し、日本を除く全地域で増収
 (日本：消費税増税後の反動等による科学、映像事業の売上減少)

連結 (4-9月) (※)



医療 (4-9月)



2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

(※) グラフは主要3事業 (医療、科学、映像) の数値合計 19

売上高の地域別の状況です。

連結ベースでは、国内を除く全地域で増収となっています。国内は、科学事業で官公庁を中心に、消費税増税後の反動の影響があったこと、また映像事業で、ミラーレスの販売が伸び悩んだことが、主な減収要因です。

右側のグラフは医療事業ですが、全地域で増収です。特に前年度低成長であった欧州の回復が継続しており19%増収となったほか、アジアでは特に中国の回復が鮮明となり、アジア全体で23%の増収となりました。

2015年3月期 第2四半期実績（期初見通し比）⑦営業増益の要因

医療事業（+26億円）

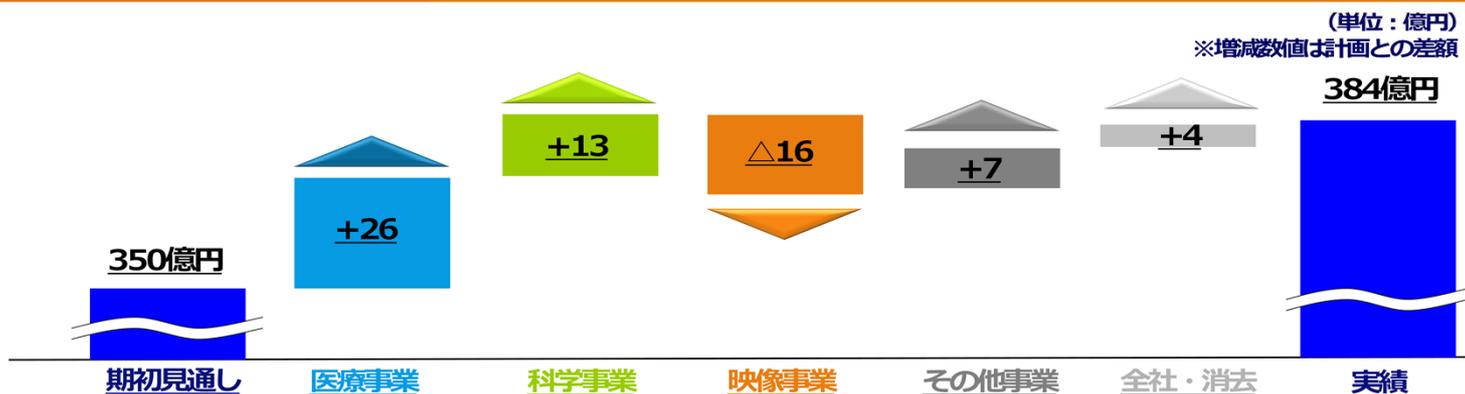
収益性の高い消化器内視鏡が好調に推移したことに加え、処置具の収益拡大により計画上振れ

科学事業（+13億円）

産業分野の新製品効果による利益率改善、販管費の削減により計画上振れ

映像事業（△16億円）

ミラーレスの売上高未達、ミラーレスへの投資継続による販管費率の上昇により計画下振れ



2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

20

期初見通しに対する営業利益の増減の内訳をご説明したものです。

期初見通しに対し上振れた主な要因は、医療事業と科学事業によるものです。医療事業は、収益性の高い消化器内視鏡が好調に推移したことに加え、処置具についても、計画を上回りました。

また、科学事業は産業分野の新製品効果による利益率の改善に加えて、海外の拠点統廃合などによる販管費の圧縮により、上振れとなりました。

映像事業はミラーレスを中心に売上が未達となった一方、ミラーレスへの投資を継続したことにより、販管費率が上昇し、残念ながら、計画を下回る結果となりました。

以上の結果、連結営業利益は期初計画から34億円増の384億円という結果でした。

連結貸借対照表 (2014年9月末)

- ◆ 自己資本比率は36.8%。有利子負債は、早期弁済も含めて約559億円圧縮
- ◆ ミラーレスを中心としたデジカメ在庫が課題
(下期の販売によって在庫は減少する見込み)

(単位：億円)	2014年 3月末	2014年 9月末	増減額		2014年 3月末	2014年 9月末	増減額
流動資産 (デジカメ在庫)	5,765 (217)	5,439 (281)	△327 (+64)	流動負債	2,763	2,746	△17
有形固定資産	1,354	1,405	+50	固定負債 (内：社債・長期借入金)	4,199 (3,468)	3,595 (2,839)	△604 (△629)
無形固定資産	1,736	1,752	+16	純資産	3,313	3,729	+417
投資その他資産	1,420	1,475	+55	(自己資本比率)	(32.1%)	(36.8%)	(+4.7pt)
資産合計	10,275	10,070	△205	負債純資産合計	10,275	10,070	△205
				有利子負債	3,599億円 (2014年3月末比 △559億円)		
				純有利子負債	1,513億円 (2014年3月末比 △125億円)		

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

21

バランスシートの状況です。

有利子負債は早期弁済も含め、2014年3月末から559億円圧縮し3,599億円となりました。また、純有利子負債も125億円減少し、約1,500億円となっています。

自己資本比率はこうした有利子負債の圧縮に加えて、利益を着実に積み上げたことにより、2014年3月末比で4.7ポイント上昇し、約37%となりました。

なお、デジタルカメラの在庫については大きな課題と認識しております。金額ベースで、約8割はミラーレスの在庫ですが、これは後ほどご説明する販売施策によって、削減を進めていく予定です。

連結キャッシュフロー計算書 (2014年4月～2014年9月)

(単位：億円)	2014年3月期2Q	2015年3月期2Q	増減
売上高	3,338	3,550	+212
営業利益	285	384	+99
(%)	8.5%	10.8%	+2.3pt
営業CF	294	296	+2
投資CF	△107	△143	△35
財務CF	△219	△597	△378
キャッシュフロー	△32	△444	△412
フリーキャッシュフロー	187	153	△34
現金及び現金同等物期末残高	2,290	2,086	△204
減価償却費	169	174	+6
のれん償却額	47	45	△1
設備投資額	172	174	+2

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

22

キャッシュフローの状況です。

営業キャッシュフローは、前年同期と同水準の296億円を確保しました。

投資キャッシュフローは、主に設備投資に関連する支出により、143億円のマイナスでした。

以上によりフリーキャッシュフローは、153億円のプラスとなりました。

なお、財務キャッシュフローは、長期借入金を返済したことなどにより、マイナス597億円となりました。

2015年3月期 通期業績見通し

それでは、2015年3月期通期の業績見通しについてご説明いたします。

2015年3月期 通期業績見通し

(単位：億円)	2014年3月期 (実績)	2015年3月期 (見通し)	増減額	前期比
売上高	7,133	7,600	+467	+7%
営業利益 (営業利益率)	734 (10.3%)	880 (11.6%)	+146 (+1.3pt)	+20%
営業外収支	△225	△180	+45	-
経常利益 (経常利益率)	509 (7.1%)	700 (9.2%)	+191 (+2.1pt)	+38%
当期純利益 (当期純利益率)	136 (1.9%)	450 (5.9%)	+314 (+4.0pt)	+230%
円/US\$	100円	105円	5円 (円安)	
円/Euro	134円	137円	3円 (円安)	
売上高への影響額	-	+160億円		
営業利益への影響額	-	+82億円		

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

24

連結の通期業績見通しについてご説明します。

通期業績見通しは期初に公表した数値から変更はございません。

売上高は前年同期比7%増の7,600億円、営業利益は20%増の880億円、当期純利益は3.3倍の450億円となる見通しです。

なお、足元の為替レートの動向を考慮し、下半期の為替レートを1ドル107円、1ユーロ135円、年間では1ドル105円、1ユーロ137円と予測しております。

。

2015年3月期 セグメント別業績見通し

- ◆ 医療、科学、その他の営業利益を上方修正
- ◆ 映像事業は、ミラーレスの影響により下方修正

(単位：億円)		2014年3月期 (実績)	2015年3月期 (最新見通し)	前期比	2015年3月期 (期初見通し)	期初見通し比 増減額
医療	売上	4,923	5,480	+11%	5,400	+80
	営業利益	1,127	1,185	+5%	1,150	+35
科学	売上	985	1,040	+6%	1,040	±0
	営業利益	49	50	+1%	45	+5
映像	売上	961	900	△6%	970	△70
	営業利益	△ 92	△ 75	-	△35	△40
その他	売上	264	180	△32%	190	△10
	営業利益	△ 54	0	-	0	±0
全社・消去	売上	-	-	-	-	-
	営業利益	△ 297	△ 280	-	△280	±0
連結合計	売上	7,133	7,600	+7%	7,600	±0
	営業利益	734	880	+20%	880	±0

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

25

セグメント別の見通しはこちらの通りです。

医療事業は業績が堅調に推移していることから、年間見通しを売上高80億円、営業利益35億円、それぞれ上方修正します。売上高は前年同期比11%増の5,480億円、営業利益は5%増の1,185億円を見込んでおります。

映像事業は、ミラーレスの販売状況等を受けて、年間見通しを売上高70億円、営業利益40億円それぞれ下方に修正しました。これにより年間の売上高は前年同期比6%減の900億円、営業損失は75億円となる見込みです。最後に映像事業の下半期の対応策について補足します。

映像事業 2015年3月期 通期見直し修正

2015年3月期 下半期見直し

(億円)	2014/3期 下半期 (実績)	2015/3期 下半期 (見直し)	前年同期比 増減	
売上高	491	499	+8	売上高 ・欧米市場でOM-Dを軸に販売 ・日本市場ではPENの新モデルE-PL7投入により てこ入れ ・プロ仕様レンズラインナップ強化によるレンズ 売上の増加 ・在庫圧縮のため、エントリーモデルは価格対応 により販売
ミラーレス	246	343	+97	
コンパクトカメラ・その他	245	156	△89	
売上総利益	201	213	+12	売上総利益 ・ミラーレス等高付加価値製品にシフト
販管費 (販管費率)	266 (54.2%)	242 (48.5%)	△24 (△5.7pt)	販管費 ・広告宣伝費等の削減によるコスト削減
営業損益	△65	△29	+36	営業損失縮小

2014/11/7 No data copy / No data transfer permitted

26

こちらが下半期の見直しです。

ご覧の通り、上半期に20%の増収を確保したミラーレスの売上増加により、映像事業全体では前年並みの売上高が確保できると想定しています。

ミラーレスは、欧米市場で伸び始めたOM-Dシリーズの販売をさらに拡大することに加え、低迷が続いている日本・アジア市場では、PENの新モデルを投入し、PENシリーズの販売をテコ入れします。

加えて、ラインナップを拡充した高価格帯のプロ仕様レンズによって、レンズビジネスの売上拡大を図り、売上高全体をミラーレス中心にシフトしていきます。

課題となっている在庫削減に向けては、既の実施している生産調整に加え、エントリーモデルの価格対応を実施します。

こうした取り組みにより、来期に向け在庫も適正な水準に圧縮していきます。

費用削減については、より効果的、効率的な宣伝投資により広告宣伝費を削減することや、物流など間接コスト等を見直すことで、前年同期比で24億円減少、販管費率を5.7ポイント低下の48.5%とする計画です。

以上のように、ミラーレスの売上確保と在庫圧縮、販管費の削減を図りながら、営業損失を29億円に留める予定です。

また、来期の事業環境につきましても、楽観できない状況が継続すると認識しております。さきほど笹がご説明した来期に向けた構造改革を、この下半期中に確実に進めて参りたいと思います。



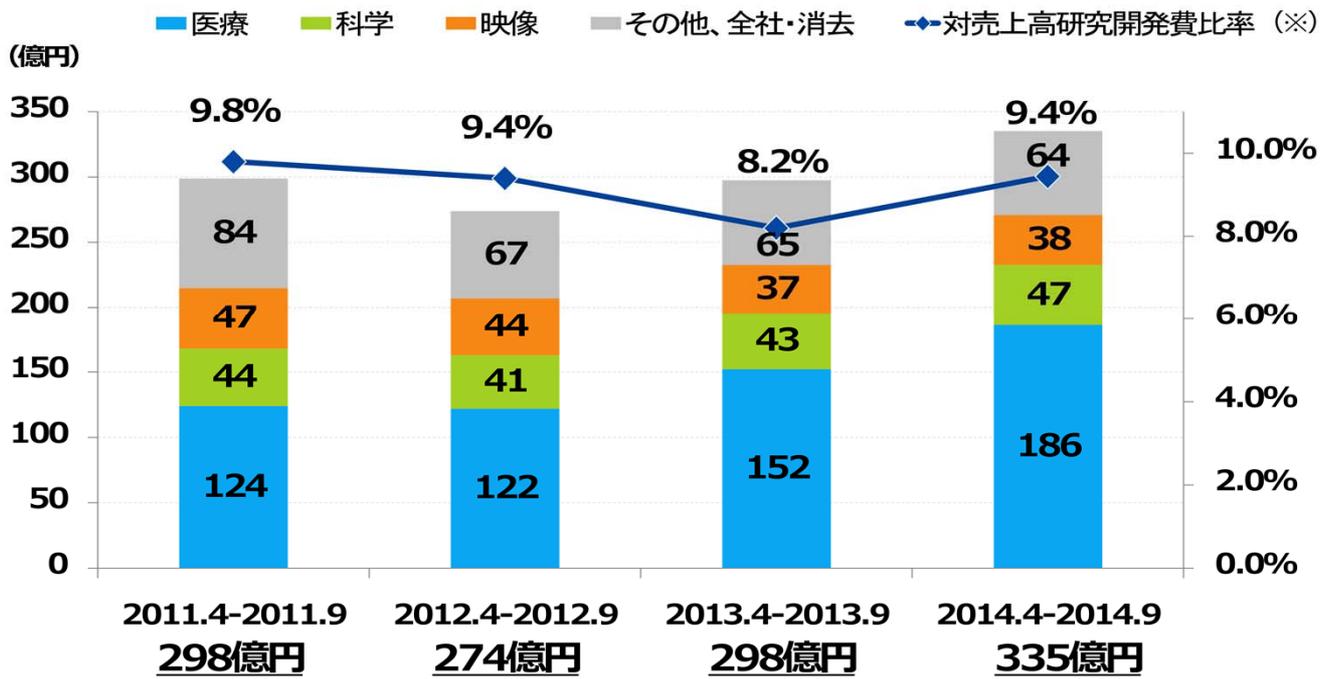
最後に、当期の期末配当につきましては、引き続き現時点では未定とさせていただきます。

今年度の最終的な損益や内部留保の状況をみながら改めて検討をさせていただく所存です。引き続きご支援のほど、よろしくお願い申し上げます。

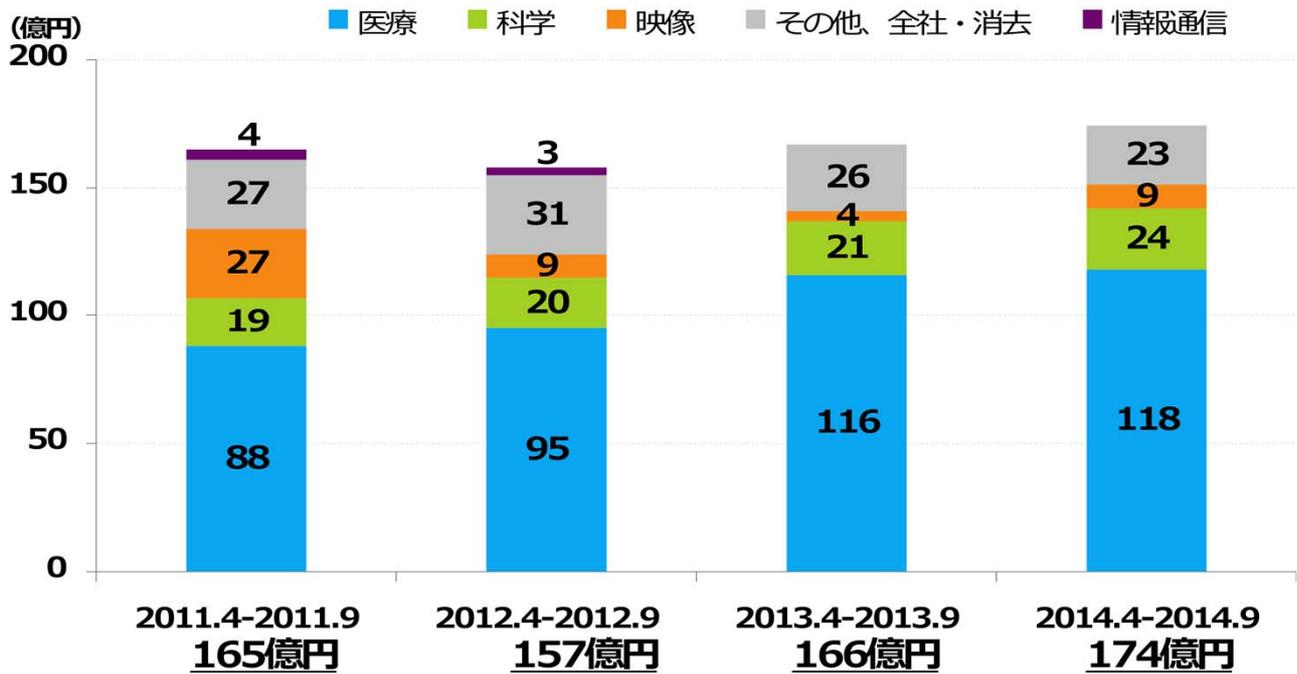
私からは以上です。

参考資料

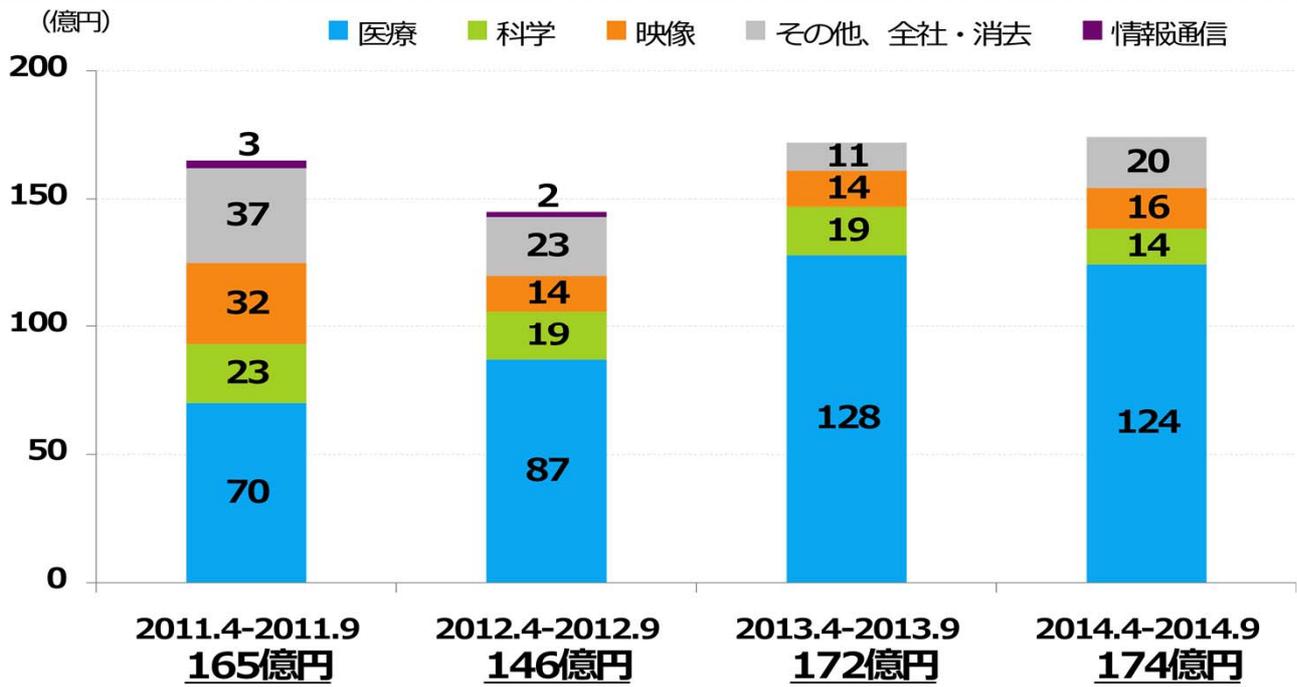
【参考資料】 研究開発費



【参考資料】 減価償却費



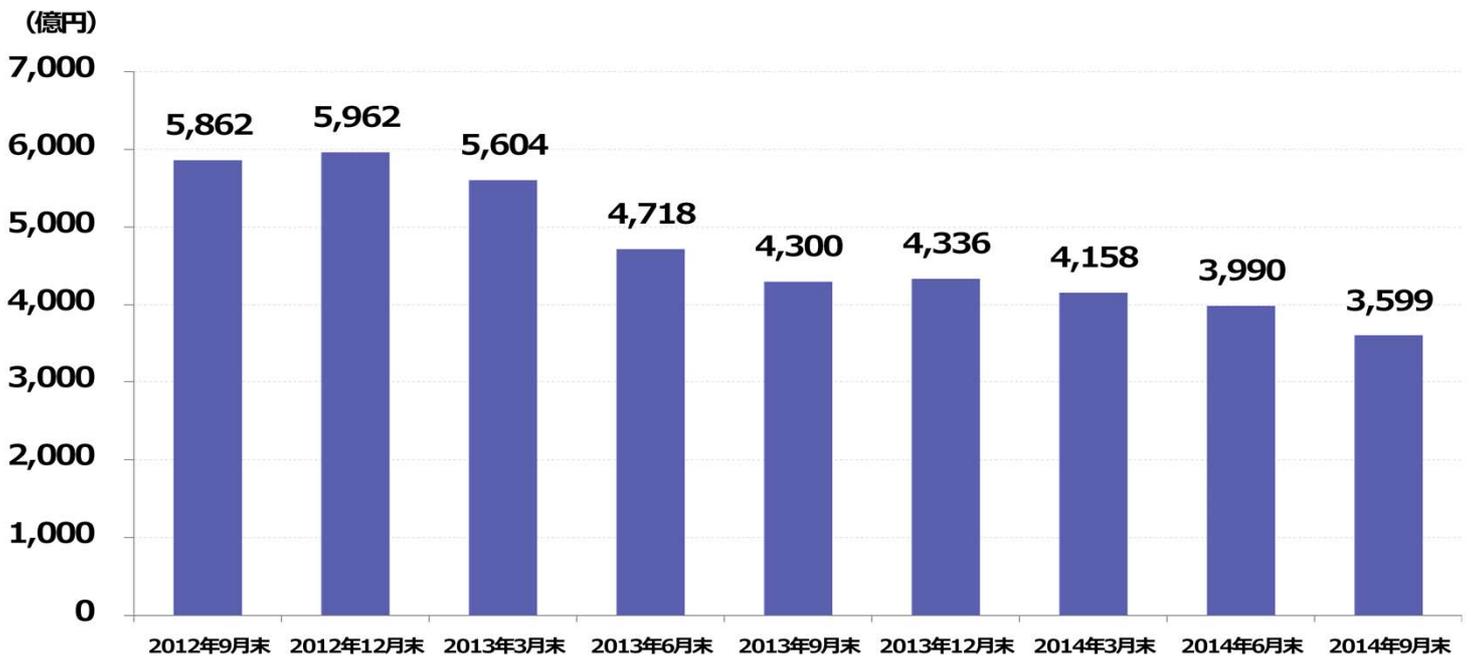
【参考資料】 設備投資



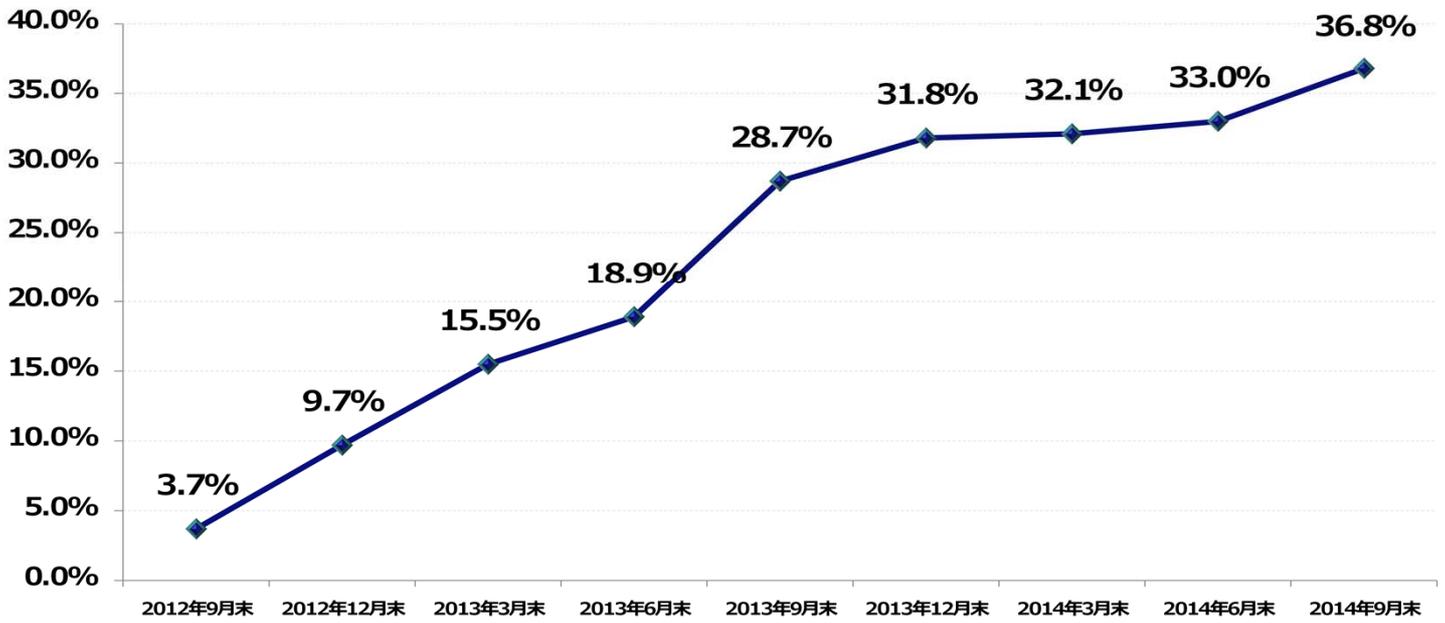
【参考資料】 中期経営計画 セグメント別業績目標

		2015年3月期 (期初見通し)	2015年3月期 (最新見通し)	2017年3月期
売上高	医療	5,400億円	5,480億円	6,500億円
	科学	1,040億円	1,040億円	1,350億円
	映像	970億円	900億円	1,000億円
	その他	190億円	180億円	350億円
	合計	7,600億円	7,600億円	9,200億円
営業利益	医療	1,150億円	1,185億円	1,500億円
	科学	45億円	50億円	150億円
	映像	△35億円	△75億円	90億円
	その他	0億円	0億円	10億円
	全社・消去	△280億円	△280億円	△320億円
	合計	880億円	880億円	1,430億円

【参考資料】 有利子負債



【参考資料】 自己資本比率



OLYMPUS

- 本資料のうち、業績見通し等は、現在入手可能な情報による判断および仮定に基づいたものであり、判断や仮定に内在する不確定性および今後の事業運営や内外の状況変化等による変動可能性に照らし、実際の業績等が目標と大きく異なる結果となる可能性があります。
- また、これらの情報は、今後予告なしに変更されることがあります。従いまして、本情報及び資料の利用は、他の方法により入手された情報とも照合確認し、利用者の判断によって行って下さいますようお願い致します。
- 本資料利用の結果生じたいかなる損害についても、当社は一切責任を負いません。